

新春座談会 1985年に期待をかける

北海道木材協会会長 松原 東一郎 さん

北海道合板工業組合理事長 諏訪 静 さん

北海道木材チップ協会会長 松浦 光二 さん

北海道木材協会専務理事 秦 貞彦 さん (順不同)



左から、秦さん(司会)、松原さん、諏訪さん、松浦さん

私事で恐縮ですが

秦：北海道の木材関連産業といえますとやはり製材・合板・チップということになるかと思えます。そういう事でお三方にお集まり頂き、お話を伺いたいと思えます。

まず59年を振り返り、私人として印象に残った事・トピックス等から伺いたいと思えますが、松原さんからお願いします。

松原：新春早々自慢話になって恐縮ですが、昨年は、多年にわたり商工業の振興に尽した功績により藍綬褒章を頂いたり、中央労働災害防止協会の緑十字賞を受賞したほか日本坑木協会、石炭工業協会役員・会頭としての20年勤続、北海道商工会議所連合会役員・会頭としての20年勤続、栗山商工会議所役員・会頭としての20年勤続など数々の表彰を受け

ました。

また、昨年4月三男の結婚式を済ませ、三男一女のすべてが家庭を持ちまして、親としての責任を果たすことができたところとほっとしているところです。

業界が大変苦しい1年であったのとは裏腹に良い年であったというのが私の印象です。

諏訪：私人としては可もなく不可もない1年でした。ただ、春に家内を連れてオーストラリアをみてきましたが、アメリカともヨーロッパとも違う大陸という事でとても感銘を受けました。

松浦：私は、秦さんと同じ大正13年生まれということで還暦を迎えました。60歳と言うと人ごとのように思っていたのですが、昭和60年は60歳以上の第一歩と考えている訳です。

私の大先輩にあたる前の三井物産札幌支店長が、還暦の祝いだけは絶対に受けるなと言われるので

す。何故かと言うと、いまや還暦は70歳だ、あまり早くお祝いを受けると早死にするぞというきつ御忠告を受けて、去年は家族の者にもおれは受けないと標榜し還暦を過ごしています。

またまた厳しかったこの1年

秦：私も還暦は70歳、10年後であると言いたいです。次に皆様の専門分野に入りたいと思います。いろいろの会・団体のトップとして、また事業人として昨年を振り返って頂き、我々を取り巻く厳しい問題点にどのように対処してきたかザックパンにお話し頂けますか。

松原：広葉樹の方はまああの形できたのですが、針葉樹については住宅着工の低迷から厳しい状況になっています。この問題をどうするのか、今年の林業年次大会で5つの委員会をもうけ、そのなかで意見の集約を図ってきました。



松原氏

針葉樹製材業については大分工場数も減ってきたのですが、これからも約130工場程減らさなければなりません。この構造改善をどう進めて工場を統廃合し、それをどう行政に反映させていくか、これが問題です。来年度から国有林の販売特例措置が外されるので、まずこれを北海道独自の形で更に進めて頂きたいと思えます。

価格の低迷をどう安定させていくか、これについては自主減産で対応してきました。本州では大幅に下落しましたが、道内では弱含みながら大幅な価格の下落もなくなんとかやってきました。それと、本州市場の開拓ということで本州の木材市場に出品したところ、従来とは異なり仲々良心的だとの評価を頂き、これからも移出を強化していきたいと思っています。

諏訪：台湾の合板メーカーとの競争に明け暮れた、大変な1年でした。合板業界はアメリカの住

宅着工数に大きく左右されるのですが、59年度アメリカの住宅が好調だったにもかかわらず、台湾製の道材合板が過剰生産になって安売りしたため、我々も原価を割って出荷しなければなりません。価格問題は完全に我々の手を離れてしまったという感じです。これが一番頭の痛い問題です。原料もどんどん台湾に流れました。単板は仕方ないにしてもフリッチが台湾に流れ、それが製品化されてアメリカに輸出され、我々の市場を食うというのは如何ともしがたいのです。

そこで合板業界としては始めてセンフリッチの東南アジア向輸出自粛を各方面に要請しました。一定程度の効果はありましたが、根本的には高値のところに流れるのはしかたありません。そこで業界としてはコスト減に引き続き努めました。合板メーカーは大半が赤字操業を強いられています。台湾でもそれなりに厳しいらしく、つぶれたり操短する所もあったと聞いています。

組合としては、昨年10月末に集まり輸出競争のないランバーコアーについて価格を上げ成功しつつあります。また、内需合板についても赤字操業脱出のため値上げをし、良くなる傾向にあります。この状態を維持し脱落者をださないようにして行きたいと考えています。

松浦：御存知のようにチップ材については、5つの紙・パ会社が何十年も前からその系列化が図られています。チップ材協会はその中にあって横の連絡機関です。チップの価格・数量については、親会社・子会社という縦の関係で決定されていますが、我々も横のつながりを強化し、陳情も進めているのです。

58年度パルプ材の量は、対前年比7%、また59年度は、前年に横並びになろうかと思われ。昨年度の立木伐採量は、880万立方メートルで今年度は堅くみて830万立方メートル、そのなかでチップ材の出荷は50%にも達しています。チップは製材の兼業という形での出荷も多い訳ですから、価格が少しでも上がれば製材も潤います。

ところで国有林は昨年基準価格を3回も値上げしましたし、紙・パは史上空前の利益を上げてい

るので、チップの方もなんとかして頂きたいと陳情をつづけています。

こうありがたい1985年

秦：55年から59年までの厳しい現況を踏まえて、60年をどういう方向で乗り切っていくとしていくのか1、2点に絞ってその課題をお話しいてほしいです。

松原：59年度は稲作が非常に良かったという事で多少住宅着工の伸びも期待できるかなと思います。本来的には従前通りの構造改善を進めていきたいと思います。

需要開発という面では、今年度5,000万円の資金を集めて北方圏に適したモデルハウス造りを工務店、販売店、業界、道一体となって進めて行く計画です。また新建材に押されればなしの木材ですが、なんとか木の良さをTV等を通じPRしていきます。北海道は日本の中の最大の森林王国であり、業界が良くなるのが国有林・道有林を良くすることだと考えています。国産材時代に対応した国有林・道有林のありかたを探っていくてほしいと思います。

諏訪：台湾との競争はなくならないでしょうね。こちら赤字にならないように頑張らなくてはなりません。輸出のみに頼らず国内向きの新規需要を拡大し、また安定化すれば業界も潤うでしょうが、これも厳しいですね。しかし行政ばかりに頼らず我々も努力して行きたいと思っています。



諏訪 氏

松浦：道産チップの優先利用を第一の旗印にしていきます。紙・パも諸般の事情から輸入チップ、故紙等を使わなければならないのかもしれませんが、長年の紙・パにつながったチップ工場との歴史を考えて頂いて、あるいは経済理論に反するかもしれませんが、まずこのことをお願いしたいと思っています。

日本チップ材連合会で音頭取りをしている、工

場に出る背板チップを廃材原料と呼ぶに工場背板原料と呼び、廃材という言葉がなくしていくというキャンペーンをしています。背板チップからも同じ繊維がとれるのだからチップ材との価格差を縮めて頂きたいのです。古くて新しい問題ですがこれについても根気よく続けていきます。日本の景気が上向きになりつつあるなか、木材業界は取りのこされている感もありますが、紙の使用量は景気回復とともに増加するものと予想しています。多少とも我々のチップの使用量を増やして頂きたいものです。

需要拡大一木造住宅の建設促進に活路

秦：どうも有難うございました。お聞きしたところ、それぞれ需要拡大が最大の課題だという事ですので、これに的を絞って話を進めたいと思います。始めに私から道木協が60年度の木材の需要拡大について何をやろうとしているのかそのメニューを紹介しておきましょう。

過去3年間道の補助を得まして、①関連業界への働きかけ、②公共機関への要請、③本州市場への売り込み、④一般大衆に対してのPRをしてきました。

60年以降については、なんと言っても木材を一番使うのは住宅でありますから、木造住宅の建設促進に焦点を絞っていきたくと思います。先程、松原さんから少しお話しがあったのですが、国有林の援助による木造モデル住宅を60年度協会建てたいと思います。これは59年度の新規事業として国有林材の販売促進という背景もあり、国有林が建設資金すべてを負担して東京の晴海に建てました。60年度は、北国型モデルハウスでやろうということで青森も手を上げていますが、これを是非北海道に持ってきてほしいものです。北海道には、すでに需要拡大協議会があるので受け入れ易いと思っています。

いまのところ、札幌にある道新マイホームセンターに建て、一般の方々にPRするとともに、大工さんや工務店さんの木造住宅建設技術の研修の場にする構想も持っています。

また一般に対してのPRは、印刷物・口コミでやって来ましたが60年度は新聞、TV等の公共媒体を用いていくのが効果的であろうということで、現在具体的なことを検討中です。製材についてはいまお話しした通りですが、それ以外に業界独自の、新たな観点による需要拡大の施策もあろうかと思うのでそれについてお話しいたしましょう。

諏訪：以前国の補助を頂いて、サンプル（生の合板ではなく内装に直ぐ使える形に加工されたもの）を、全国の家具メーカー・建築事務所等に持ち歩き一定程度の成果をあげました。これを60年度にも行う予定です。

秦：松原さん、製材に関してだけではなくもっと大きく木質材料の需要拡大に、何か抱負のようなものはありますか。

松原：廃材とか木くずに対してもっと目を向けていかなければなりません。木材は従来投げるところがいっぱいありましたが、現在は木くず・皮も利用できるようになりました。これは林産試に負うところ大です。木材の飼料化も大分実現に近づいてきました。しかし、どんなにいいものを開発しても需要がなければ困るのです。

土壌改良材などは、国で大々的に使ってもらいたいものだとしてPRして頂ければ、低質材の利用拡大の道が開けると思います。また、林業構造改善事業の中でシタケなどキノコ栽培も良いのではないですか。とにかく有効利用できるものはすべてやって行きたいと思えます。

松浦：この間、全千連の会合の場で林野庁の林産課長が言われるのに、5年間かけて需要拡大いまだというのはおかしい。私は林産行政を預かるものとして60年は木材需要拡大元年にしたいと。

それはそれとして、私の友人でもある著名な建築家が、移出は別にして北海道の木材需要



松浦氏

の中で本州と同じ3寸角や3寸5分角というのはおかしい。北海道の厳しい環境に合った部材があってもいいのではないか。寸法が5分あがただけで耐寒性・耐暑性に富み、防音性にも優れた木造住宅ができる。味の素が消費拡大をねらい容器の穴を少し大きくした。それと同じようなアイデアでやれば木材の消費拡大とともに、木造住宅の良さをもう一度見直してもらえるのではないか。そのためにも木代金は高くなるかもしれないが、4寸角にすべきだと、アドバイスを受けました。

それから国有林や道有林から頂いた貴重な材ですから、さしみになるいいところは高級合板に、次の等級の原木については製材なりフローリングに、学童用机の天板には低質材を用い、最後に残ったものはチップ、皮はバークたい肥というように無駄なく使っています。私事にわたって恐縮ですが、そのように有効利用を心掛けています。

秦：製材の規格の問題について日本住木センターと北海道製材協同組合が共催して去年の11月2日にパネルディスカッションをしました。そのときのパネラーの北大工学部の先生も、10.5 cmは北海道の寒地住宅に合わない、12 cmにすべきだと言われていました。

さて話題は変わりますが、林産試に今後要望することはございませんか。

林産試験場への期待

諏訪：今の木材屋の現況は加工すればする程損するといわれています。本来加工すれば儲か^{もう}らなければならぬのに残念です。林産試にも、こうすれば儲かるというようなものを作ってもらいたいものです。

松原：林産試開発のハニカム、集成材は、本州で大いに成功しやられていますし、乾燥に始まる講習会など枚挙にいとまのない程の成果をだして頂いています。ただ、一つ言えば木糖、これは時代の流れだから仕方ないでしょう。これから一層低質材、人工林材が増えるからその利用開発を期待しています。ところが、これはよく言われていることです。林産試がせっかく良いものを開発して

も、道内の企業がそれを利用せず本州企業が持って行ってしまふことがあります。これは残念なことではないでしょうか。業界の人はもっと林産試に関心を持って、林産試からこれはどうですかではなく、業界の方からこんなものを作ってみてはどうか、という形にならないといけないと思います。

私のところは、北海道で一番最後にできた合板工場です。いまになっては作らなければ良かったと思いますが(笑)、設立に当たり最初から林産試にいろいろ技術指導を受けました。それが非常に良かったと思っています。それから、内需ラワン合板についてですが、ラワン材が今後とも安定して入荷されるか、又は入ってきても値段が相当高くなってくのではないかと懸念しています。そこで、中芯にラワン材に代わるものとして道産材を考えています。現在も剥ぐことは可能なのですが暴れがひどいので、これをなんとかすることを考えてもらいたいと思います。

秦：ラワンに代わる針葉樹の問題を林産試にという要望があったのですが、その他針葉樹合板について詳しい諏訪さん、何かございませんか。



秦 氏

諏訪：北海道には松がいっぱいあるので、なんとか合板にも利用できればよいのですが、構造用合板はアメリカが本場ですね。ソ連材を用い舞鶴で構造用合板が製造されていますし、いずれソ連でも製品として輸出してくるだろうと思われまふ。そうなれば北海道でやっても値段的に太刀打ちできないでしょうから、北海道でやるなら今後とも雑木合板でいくしかないのではないかと思います。

大切な木の良さのPR

諏訪：ちょっとこの問題からは離れますが、この間、NHKのウルトライで木材が我々の住環境において、例えば部屋の調湿作用に優れ素晴らしい

いものだという木材の良さをPRする番組がありました。ああいう企画をNHKだけではなくどんだん外でもやって頂きたいですね。

秦：それは見ました。我々のところでもビデオに録りましたし、全木連を通じ再放送を願うハガキをだすよう会員にもお願いしたところです。

諏訪：私、アメリカに行きまして、ビルのなかの偉い人の部屋、立派な会議室には必ず合板が張ってあり驚きました。日本では、どの部屋もクロス張りのようで、合板を張っているところは少ないですね。あのTVを見て自分の部屋に合板を張ったほうが良いと思う人は随分いたのではないのでしょうか。

松原：建築基準法の中で木材は、防火基準等で、随分不利な扱いを受けています。これは一つには、木材関係者がその担当に入っていないからでしょう。このままでは新建材にみんな市場を取られてしまいます。そこで、今年から全木連の公平副会長が委員に入って、防火基準についても不合理なものについてはその枠を取り払うように全国段階で努力をして行くことになりましたし、道でも声をあげて行きます。

松浦：昨年、自民党の議員会館が焼けました。そこであの中の部長室・応接室には木材を使ってもらい、議員さんに対する認識を深めてもらうという運動を進めています。こうやって少しずつでもやっていかなければ……。

秦：今日は、皆さん公私共に大変お忙しい中、沢山の貴重な御意見を頂き本当に有難うございました。

協会：ウッドエイジ1月号では、この新春座談会のあとに「木の良さ」の特集を組みます。木肌のもつ自然の美しさ、やさしさ、ぬくもりなど感覚的な意味で、木製品へ多くの人の関心が集まっています。この特集では、断熱性とか弾力性、吸音性、加工のし易さ、強さなど機能性の面から木の良さを追求して見ました。まず、木材屋さんに木の良さを理解して頂き木需拡大の武器にして頂きたいというのが一つの狙いです。御活用頂きたいと思います。(文責 石河周平)